# 青梅市文化財ニュース

第４３４号

令和５年１２月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

## 天ヶ瀬地区の水神講

青梅市郷土博物館から水神講のお祭りが、青梅天ヶ瀬地区（青梅市立第一中学校の南）で行なわれるということをお聞きし、三好指導員と一緒に見学させて頂きました。

令和５(2023)年８月６日（毎年８月の第１か第２の日曜日に実施）に講元である天ヶ瀬町の並木茂氏のお宅を朝９時前に訪問させて頂いたところ、丁度水神様のお供え用の餅つきの準備をされていました。毎回 12 ㎏の餅米をふかし、餅をついて熱いうちに隣に用意したテーブルの板の上についた餅をのせ、そこで待っている人に渡し、その人達が餅にきな粉をまぶして丸くして作っていきます。その中から形の良いものを水神様のお供え用に二つ重ねの餅を作っておいておきます。講の会員は全員男性で 19 名だそうです。

戦前から戦中は周辺が麦畑であったため、ウドンを作っていましたが、昭和 30 年頃から餅を作るようになったそうです。

コロナ禍の４年間は講を中止していましたが、その間、並木茂氏が 15 ㎏の赤飯をふかして、全員に配ったそうです。

また、昔は川で捕った鮎を 200 匹位焼いたこともあったそうです。

並木家では、昔すぐ下の多摩川の天ヶ瀬淵で水車を回し、粟やひえなどをついていたそうです。同家には、明治 27(1894)年から大正頃までの多摩川の河川占有願の文書や、大正８(1919）年の水車仲間の料金表が今も残されています。これらの文書から明治時代には並木家で水車を回していたのではないかと思われます。

水車は大雨が降ると流されるので、そのたびに重たい水車を近所の人に手伝ってもらい、川から引き上げ細い道を上まで引上げたそうです。また、大雨が降ると上流から沢山の木材が流れてきて、天ヶ瀬淵のところに溜り、それを鳶（とび）でひっかけ拾いあげ、水車を上にあげるのを手伝ってもらった人達でわけたそうです。

昔から天ヶ瀬地区には山がなかったため、焚き木にする木を購入しなければならなかったので、貴重なものだったそうです。

そして、手伝ってもらった人達にお日待ちという形ではないが、お礼の意味で並木家で、ウドン等を作って御馳走したのが水神講の始まりのきっかけとなったそうです。水

車は昭和 32〜33(1957〜1958)年頃までやっていたそうです。

大正時代になり、父清作氏（明治 45(1912)年生まれ）が初めて水神講を始め、戦争中はウドンで御馳走していました。大正８年の水車仲間の値段表が残されていますが、これをどういう形でやっていたか、茂氏が中学生のときに父親が亡くなっているので、詳細はわからないそうです。当時、茂氏はまだ中学生だったので、父親のあとの講元は近所の並木勝之助氏に代わってもらい、茂氏が 25 歳の時に講元を引き継いだそうです。

餅は 11 時頃に準備ができ、何人かで下の大岩の上に置かれている水神様の祠に、お神酒と重ね餅をもって向かいます。昔は、並木家のすぐ下から祠まで行く道が天ケ瀬と大柳の境にありましたが、現在は民有地になっているため、所有者の了解を得て民有地を通って祠へ行き、参列者で祈願をして並木家に戻りました。

水神様の祠は正面右には「昭和二十三年八月十五日建之」左には「天ヶ瀬水神講中」と刻まれています。この祠は二代目で、最初にあった祠は持ち上げた時に落として壊れてしまい、その後作り直したそうです。

祈願が終わった後のお日待ちは、昔は全員の家を持ち回りでやっていたそうですが、現在は並木家で飲食をしてお開きになるそうです。飲食代は講の参加者で負担するそうです。

青梅市内で、このような水神講を現在行っている地区はほとんどないと思われます。

貴重な行事を守っていくのは大変なことと思いますが、関係者のご尽力で末永く守って頂ければと思います。

お話を伺った方　並木　茂　氏

（文責　東山啓子）